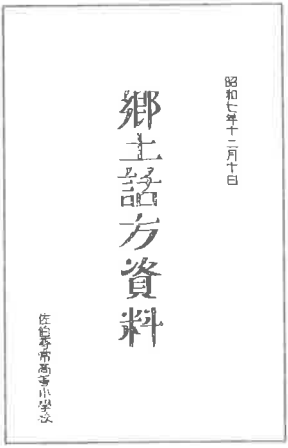
資料

郷土話方資料（七）

今から七十年前
昭和七年十二月十日
佐伯尋常高等小学校

紹介者　山本　保
（会員　佐伯市池船町）



（七）毛利高標

こんな学問好きの主様だったため、書物をお求めになった事も、又非常なものでしたが、佐伯文庫をおたてになってからは、毎年、臣を長崎につかはし、いくら少なくとも一年のうちには、たいてい五六百部優に千冊の本を、かいこんだそうです。

それがため、佐伯はわずか二万石そこ〳〵の知行の上に、お金をたくさんつかうものですから、貧亡（乏）する位だったと言うことです。

港が廃せられた明治のはじめですが、書物の入っていた大長持が、百何十番と言う番号が、あったそうです。

それには、皆書物が、一ぱいはいっていたのです。

十代目の高翰（たかなか）公は、二万七百五十六冊の本を、幕府に献じています。

今更、書物の多かった事におどろかされます。

今も、東京図書館には「佐伯文庫」と言う、印章のある書物がたくさん、あるといわれますが、その本は、皆今めったに得られない本許りで、そのうちには、お医者の本もたくさんあり、皆その当時、支那（中国）から来た本許りだそうです。

中村敬宇と言う、明治のはじめの大学者が、この本をみて、高標公がどれだけ、学問に熱心で、又どれだけの

学者であったかということが、わかると言ったそうですが、実際、その頃珍らしい、かくれた大学者だったのです。

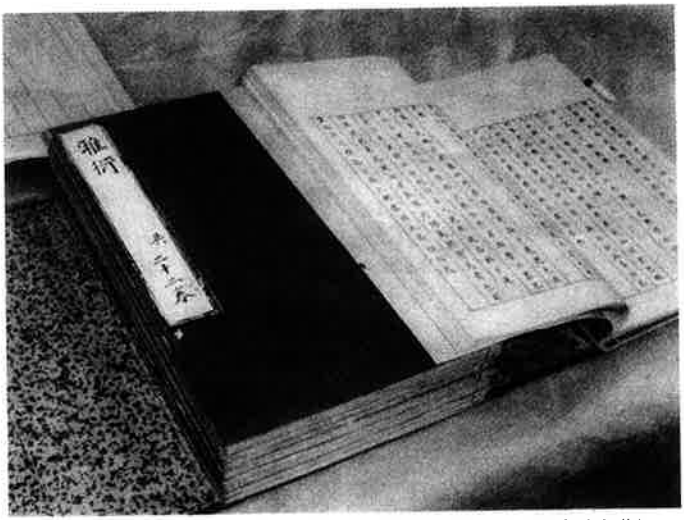
字が、又非常に上手で、その道の大家も、到底及ばないと言われている位だったそうで、今も、尚高標公の筆跡が、この佐伯の旧家には、たくさん残っていると言うことです。

こうして、高標公は学問を盛んにする一方、武の方面にも非常に心を用いました。

或る時は、臣等を連れて狩くらに、又ある時は水泳に、又あるときは武術の試合に、文と武の両道の発達に力を注いだ事は、言うまでもありません。

中学校前の馬場、その当時、若い侍たちが、白はちまきかい〴〵しく、馬術のけいこに余念のなかった、ところでしょう。あの大きな松の木も、その頃いくどとなく勇ましいお侍さんたちの馬のたづなが、つながれた事と思います。馬場の並木の松らいをきくとき、それは当時の有様を物語っているかのようで、うたた今昔の感に堪えません。

菊かほる昭和三年十一月の御大典の際、かしこくも、陛下から、御位を贈らせられたのも、高標公が文武にひたすら、佐伯藩の民、幸あれと、仁政を施した功績を思召されての事と思います。



高標の著作「雅 衍」(片岡家寄贈・佐伯市教育委員会蔵)